



けている。昔ギリシャでピグマリオンという彫刻家がいる、自分の作った女体があまり美しいのですっかり魂を奪われてしまったのを、ヴィーナスが哀れんで、その彫像に生気を吹き込んで結婚させる訳である。ユイスマンは作中人物に、美術家というのはひとりで作品を作るつまり母なしで子を産むから、もともとが雌雄両体人間だというわけである。桜井の作品にもこの思想があって、この出処を彼に聞いたら、ラマ教曼陀羅あたりからだと思うと云う。ユイスマンのピグマリオン主義、さらに逆ってプラトンの人間元祖雌雄両体説などは、いずれもインドのヴェーダ思想と重っていきうようなので、もとをただしていくと、桜井のヘルマフロイドもおなじところにいきつくと思う。こういうことを知識としてではなく、自分の無意識のうちから探りだしてみせてくれるところが、作家というものの興味深さだと思う。

パリのある画市での桜井の個展の折に、私は短い序文で、これはニルヴァーナ〔涅槃ねはん〕で、みていると、「歓喜のどよめきがこちらに伝わってくる」と書いたら、ポーランド出身の画廊主夫人が、顔色を変えてすっとなできて、「涅槃」という言葉をやめてくれという。ヒッピーと涅槃と続くと、これは麻薬患者の絵ということになって、「うちはそんな不真面目な画廊ではありません」と云うのである。彼女はニルヴァーナといえば、ヒッピーが麻薬で恍惚状態になることだと思い込んでいて、それしか知らないのである。私は断乎として拒った。

この考えは今も変わっていない。この個展の頃よりもさらに、桜井の作品は手が込んできて、謎が多くなっている。作品を眺めていると、大らかな歓喜のひびきと謎解きの楽しさであることないのである。